

# 栗橋関所番士屋敷跡のキャップガン

福田 聖 瀧瀬芳之

**要旨** 近世六街道の内の一つ、日光道中唯一の関所である栗橋関所に勤番した番士の屋敷跡から拳銃形鉄製品が出土している。江戸時代後期から明治時代前半にかけて、当時の利根川流域には水害除けの水塚が造られ、番士の屋敷跡もその上に建てられている。鉄製品は加藤家の盛土中から出土している。報告書作成時には全体が錆に覆われ遺物の詳細は不明であったため、実銃と推定していた。その後の鋸落としにより遺物の詳細が明らかになり、「アンティーク・キャップガン」であることが判明した。再実測を行い、詳細について観察所見を述べた。合わせてアメリカにおける生産当時の社会背景について述べた。生産の実態や日本への輸入、流通状況、加藤家から出土するに至る経緯等が課題として残った。

## 1 はじめに

栗橋関所番士屋敷跡は、久喜市栗橋北2丁目3394-2他に所在する。近世の六街道日光道中に置かれた唯一の関所である「房川渡中田御関所」の栗橋宿側の関所に詰めた番士の屋敷跡である。

2012年に国土交通省による利根川堤防の拡幅事業に伴い、埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって調査が行われた。調査成果については、既に報告書が刊行されている（福田 2018）。

調査では、利根川近辺に江戸時代後期から明治時代にかけて多く造られた水塚の上に建てられた屋敷跡と関連遺構が検出され、18世紀前半から幕末を中心とする大量の遺物が出土した。

特に水塚の上に造られているという特殊な建築条件から、その都度の水塚の盛土の造成に伴う遺物が包含されていた点は特筆される。これまで関所に勤番する番士の具体的な暮らしぶりが明らかになるような発掘調査例はなく、大量の遺物は生活の実態をより豊かに現わすものだからである。

実際に、当時の槍先などの武具や、眼鏡や目薬の瓶などといった珍品も出土している。

特に四家のうちの加藤家屋敷跡の盛土から出土した「拳銃形鉄製品」は、これまで発掘調査によ

る資料はなく、貴重な例である。

類例がないため、当初所謂「実銃」として検討を進めたものの皆目見当がつかなかったが、調査を進めた結果、玩具である所謂「キャップガン」であることが判明した。

合わせて、埼玉県教育委員会によるその後の保存処理により鋸落としが行われ、整理段階よりもより細部についての検討が可能となり、資料として再実測の必要性が生じた。

本稿は、改めて行った実測の成果を報告するとともに、遺跡の様相と合わせて現時点までに明らかになった諸点と、それから考えられる出土の意義について検討を加えるものである。

## 2 栗橋関所の概要

近世初期の利根川河川改修による度重なる洪水により荒廃した元栗橋の宿と利根川筋を渡る「房川渡し」は、元和年間に新栗橋に移転したと考えられている。幕府は、河川改修による舟運の整備と合わせて、陸路、六街道の整備を行った。各々の街道には、峠や河川などの通行上の大きな節目となる箇所に関所が設けられていた。日光道中最大の難所と言われる利根川の渡河点に設置された



第1図 栗橋関所番土屋敷跡・栗橋宿調査地点位置図（村山 2020 より転載）

のが、『新編武藏風土記稿』に「房川渡中田御関所」と記された所謂「栗橋関所」である。

栗橋関所は、寛永元年(1624)に開設され、明治2年(1869)に廃止されるまで、245年間にわたり機能した。

関所には関東郡代伊奈氏の管轄のもと、当初森、佐々木、落合、富田の四家が番士として、二人一組で関所改めを行った。森家、富田家は、寛文5年(1665)に森氏が加藤氏に改姓するものの、関所の設置から廃止まで通して務めている。佐々木家は明暦元年(1655)に神谷家、元禄12年(1699)に長山家、寛政12年(1800)に足立家へと交代し、落合家は寛政10年(1798)年に島田家に交代した。

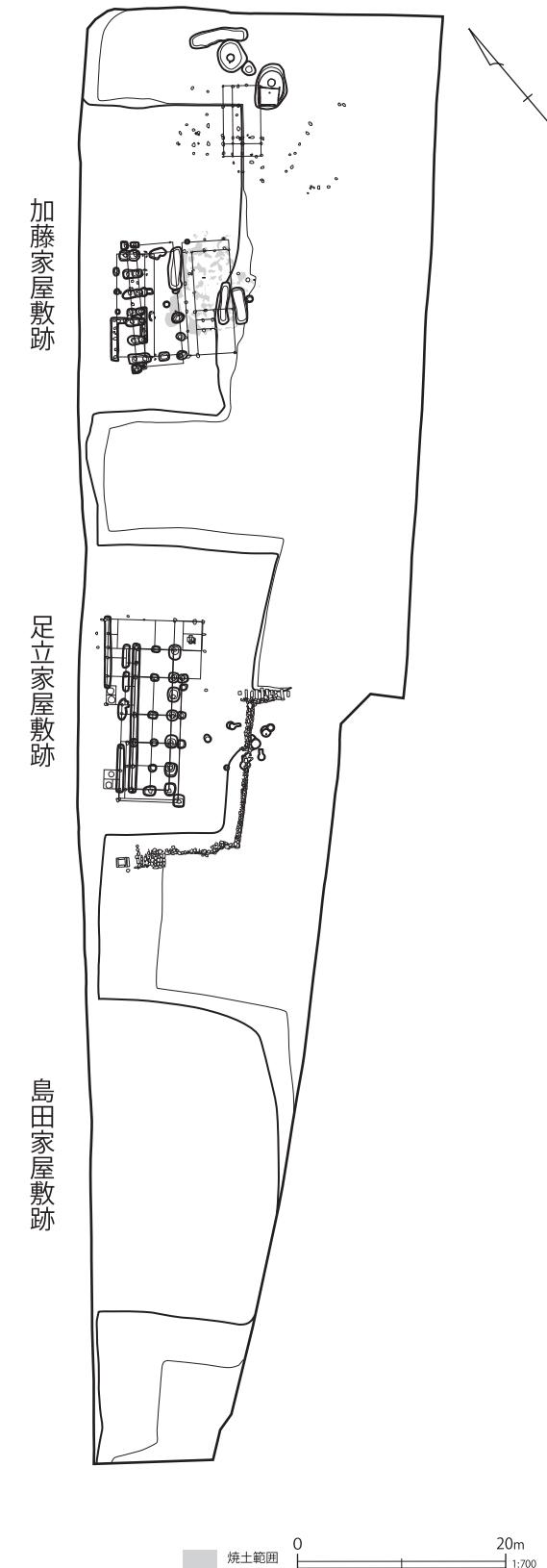
廃止時には、足立、加藤、島田、富田の四家が関所を引き払っている。

なお、足立家、島田家には番士として勤番していた日誌や各種の文書が伝世されている(註1)。多くは日誌類で、関所で何時、どのような問題が発生し、それについてどのように対処したか。また、勤めを果たすまでのトピックや、利根川の洪水や浅間山の噴火などの気象災害や火事などが記されており、関所のみならず栗橋宿全体の様相を伝える貴重な資料となっている。

番士屋敷跡の調査でも、盛土の造成が、日誌に記されたどの事柄に対応するものであるのが明らかになった。そのため、文書の記事に出土資料を合わせていこうという姿勢になってしまっていたのは否めない。

日誌には幕末の記事が多く、維新へ向けての社会の混乱ぶりがよく示されており、後述するように、それが本稿で検討対象とするキャップガンの誤った評価にもつながった。

筆者(福田)の力量不足で、文書資料、出土資料双方の価値を損ねた結果となってしまい大変残念である。



第2図 番士屋敷跡調査区全体図(福田 2018 より転載)

### 3 番士屋敷跡発掘調査の概要

関所番士の屋敷跡は、栗橋宿の北西側、関所に向かって直角に曲がる日光道中の北西側で、島中川辺領の圍堤と利根川の水除堤が重なる堤の南側に面して位置している（第1図）。

維新後屋敷地は関所廃絶時に番士だった四家に引き継がれ、今回の調査に至るまで、四家の方々がそのまま生活させていた。

今回の発掘調査の範囲は、加藤家、足立家、島田家の屋敷地に当たる。

調査は幕末頃と考えられる面まで、客土を下げて行われた。調査を担当した木戸春夫によれば、具体的には足立家の盛土に施された石垣を露出させ、それを手掛けりに全体に確認面を広げていったという。客土との判別が困難で、多くのトレーニングを入れ、確認を繰り返している。調査区にトレーニングが多いのはそのためである。

確認面の標高はおよそ 11.0 m である。調査区全体に地形が施され、平坦に整えられている。

調査では、足立家、島田家、加藤家の各屋敷跡に当たる箇所から、建物跡 6 棟、盛土 3 基、石垣

1 基、井戸跡 3 基、土壙 5 基、焼土遺構 10 基が検出されている（第2図）。遺構の時期は江戸時代中期末から明治時代初頭にかけて、年代としては 18 世紀前半から 19 世紀後半に当たる。

出土した遺物は、18 世紀から 19 世紀後半にかけての陶磁器、土器、瓦、銭貨、木製品、鉄製品、石製品で、遺跡全体で総計コンテナ 116 箱に上る。

三家の盛土と遺構の築造年代は、第3図の通りである。

### 4 キャップガンの出土状況

キャップガンが出土した加藤家屋敷跡の盛土は、30.6 m × 15.2 m の長方形で、18 世紀前半から 19 世紀中葉にかけて 3 度にわたって建物の建て替えと、それに伴う盛土の造成が行われている。最終的な盛土の高さは、1.7 m ほどである（第4図）。

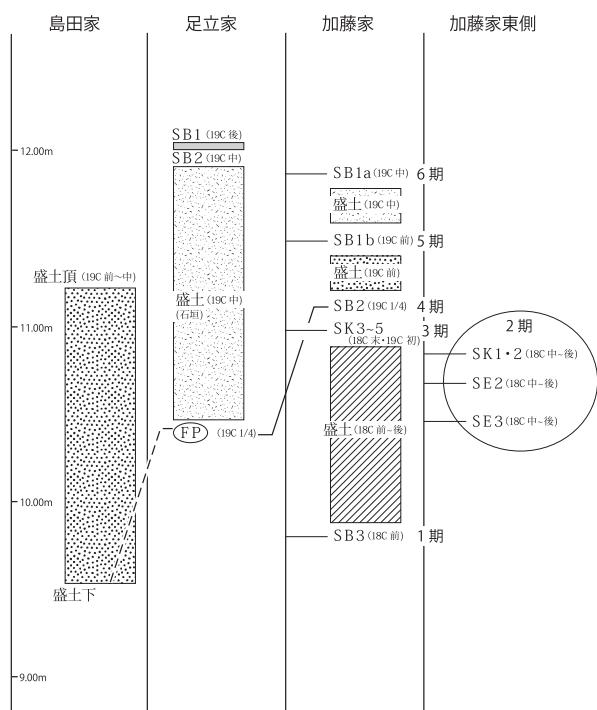
建物跡は盛土の上面から 1 棟、中位から 1 棟、盛土の下位から 1 棟、更にその下位から 1 棟の計 4 棟が検出されている。

盛土上の第 1 a 号建物跡は、5 × 2 間の側柱建物跡で、南東側に庇が取り付く。その 0.4 m 下、盛土中位からは第 1 b 号建物跡が検出された。5 × 2 間の側柱建物跡で、三方に庇が取り付く。

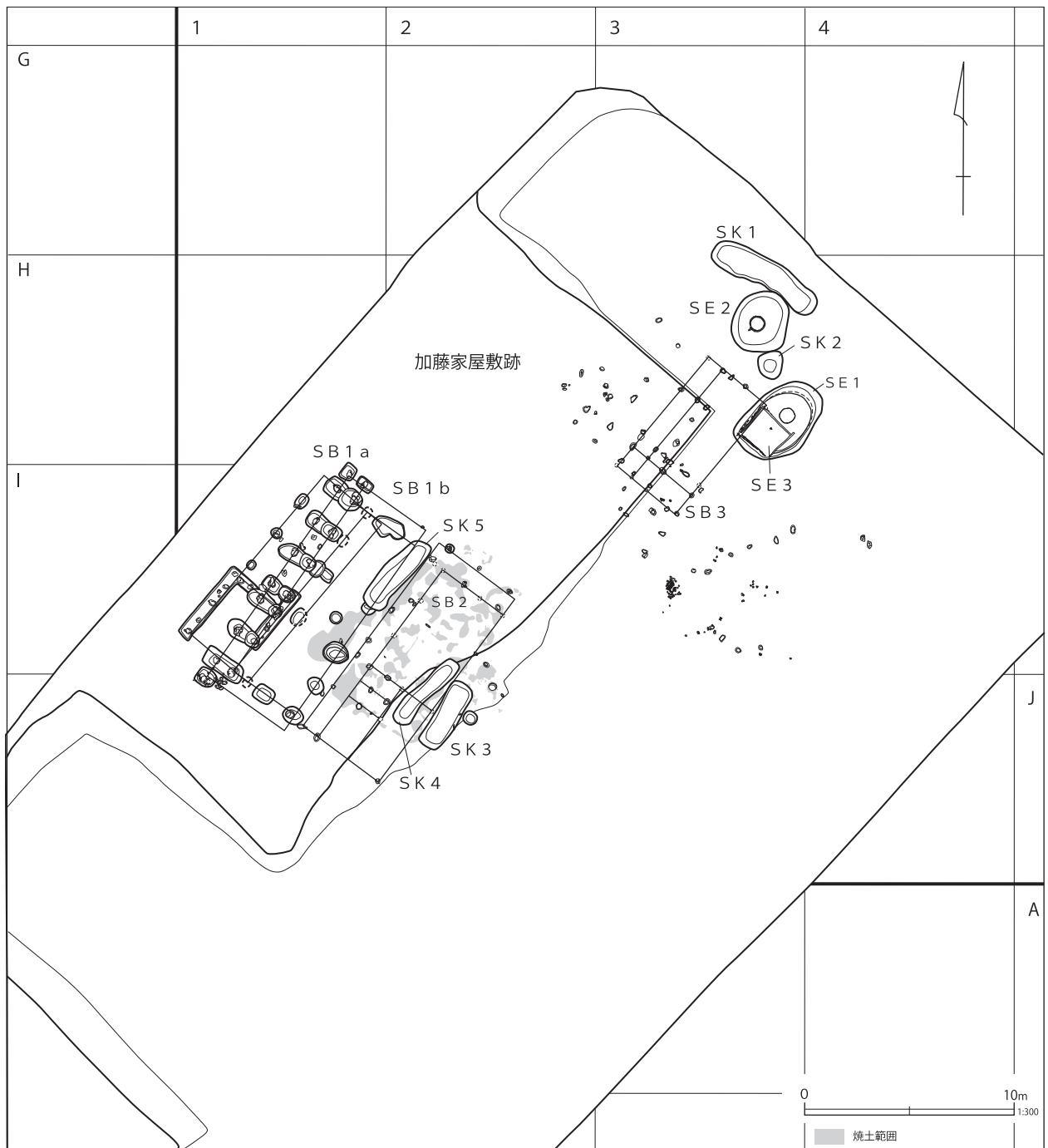
加藤家の盛土を除去した確認面からは、建物跡 1 棟（第 2 号建物跡）、土壙 3 基が検出された。建物跡は寛政 12 年（1900）の火災で焼失した直後に建てられたものである。その直下から検出された土壙からは建築材をはじめとする木製品、被熱した陶磁器、瓦が多く出土している。

盛土の 1 m 下から建物跡がもう一棟検出された（第 3 号建物跡）。確実な伴出遺物がないため時期は不明だが、18 世紀前半に遡る可能性が高い。

加藤家の盛土を除去した確認面から検出された第 2 号建物跡の年代が寛政 12 年の大火の直後であり、盛土上から検出された建物跡が明治初頭と



第3図 各屋敷跡盛土形成模式図（福田 2018 より転載）



第4図 加藤家盛土上の遺構（福田 2018 より転載）

される足立家の盛土上の建物跡と同様であるとすると、盛土の形成年代は江戸時代後期から明治時代前半頃と推定される。その後も生活空間であつたため盛土の改変があった可能性は考えられるが、全体としては大きく外れないであろう。

キャップガンはこの盛土の東側に設定した第4トレンチ内から陶磁器とともに出土している（第

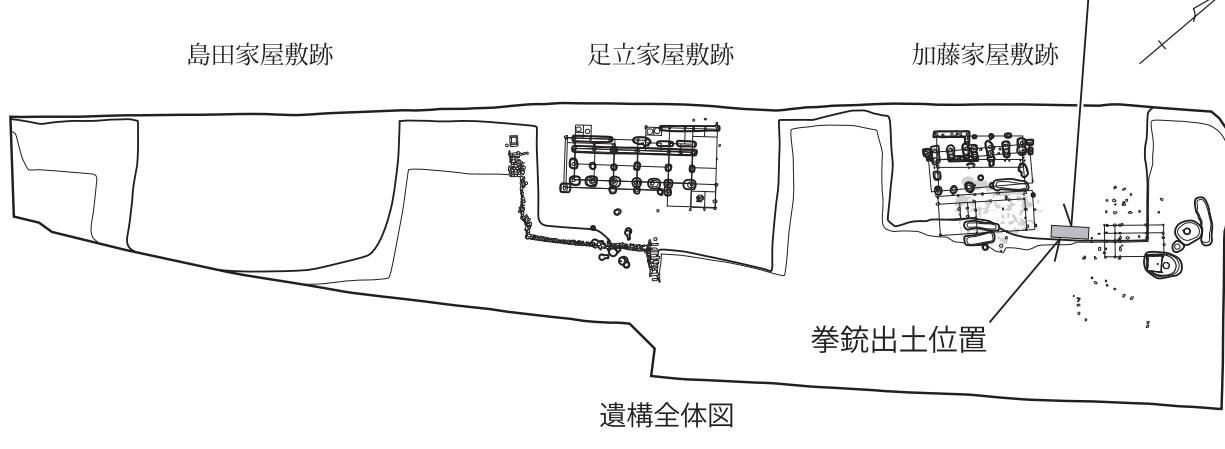
5図）。

陶磁器の内訳は、肥前系磁器筒形碗、皿、瀬戸系磁器端反碗、広東碗、湯呑碗、型押皿、瀬戸美濃系陶器片口鉢、水指、民窯産青土土瓶、白土染付土瓶、両手鍋、行平鍋などで、磁器に型紙刷りが見られないことから、19世紀中葉に相当する。

整理段階では、キャップガンも同時期のものと



盛土写真



第5図 キャップガン出土位置（写真是埼玉県教育委員会提供・図は福田 2018 より改図・転載）

考えたため、19世紀中葉ごろのものと位置づけた（福田 2018）。

## 5 出土キャップガンの観察

冒頭で述べたように、埼玉県教育委員会による保存処理に伴う鋲の除去の結果、整理段階では分からなかったキャップガンの様相を明らかにすることことができた。

キャップガンの全長は 17.95cm、高さ 8.0cm、重さ 180.5 g である。リボルバー（回転式拳銃）を模る。

構造は、表裏 2 枚の半身を合わせ、バレル（銃身）の中央部分とグリップ（銃把）エンド寄りの 2箇所で留めている。半身はおそらく鋳造であろう。ネジ留めではなく、目釘留めと推定される。内部は、バレル、シリンドラー（回転式弾倉）、フレーム、グリップにあたる部分の 4 箇所が中空になるように区画される。

本物の銃であればリアサイト（後照準）にあたる部分に、表半身に付属する火皿（径 1 センチ程度）が設けられる。フレームの中空部分には、一体となったトリガー（引き金）とハンマー（撃鉄）（以下トリガー板と仮称する）が 1 点の留め具を支点として、可動するように取り付けられる。ハンマーの外部に出る部分はほとんど失われているが、トリガーを手前に引くとハンマーが火皿を打つ仕組みである。この火皿もしくはハンマーに紙火薬（平玉火薬）を装着し、トリガーを引いて打ち当てて音を鳴らしたと考えられる。指で引く力だけでは火薬を破裂させることができないため、トリガーを引くといったんトリガー板がフレームに当たって止まり、力を込めるとそれが抜けて、勢いよくハンマーが火皿にあたるように、トリガー板の形状に工夫をしていると推定される。

バレルの長さは 8.8cm、直径は 1.3cm、口径は 7 mm である。マズル（銃口）近くにある長さ 4 mm のフロントサイト（前照準）は裏の半身に付属

する。

シリンドラーは、片側に 3 つの弾丸が装填できる 6 連発銃を模る。長さ 2.6cm、幅 2.3cm である。トリガーガード（用心鉄）は失われているが、シリンドラーの腹面にあるホゾ穴に取りつけられていたものと推測される。

フレームとシリンドラーを繋ぐ部分（ヨークまたはクレーン）には 3 並びの方形区画があしらわれ、グリップには、鋲あまり明瞭ではないが、蕨手状の浮き彫り装飾が施される。表側のサイドプレートの区画には「WHITE CAP」のロゴがある。後出の写真によると、裏側には「PAT JUNE 17 1890」のロゴがあるが、本品からは「P」と「J」しか判別できなかった。グリップとサイドプレートの地は平滑ではなく、魚々子地のように表面がざらざらしていると推定される。

以上が、X 線画像を参考とした出土キャップガンの観察結果である。

## 6 出土キャップガンの位置づけ

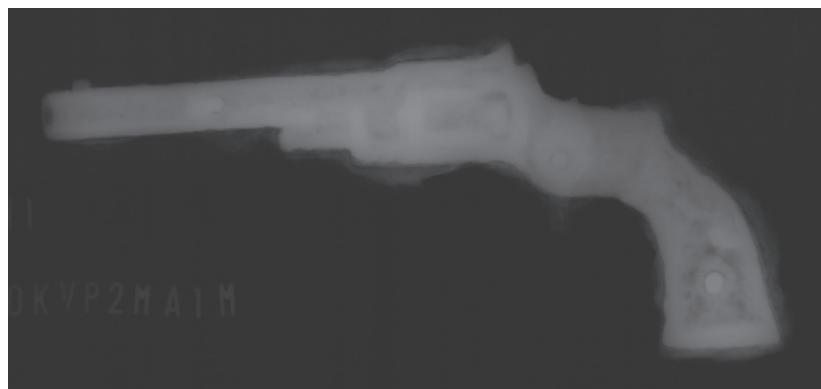
冒頭で述べたように、整理段階では所謂実銃として取り扱ったために、全く類例や評価ができないかった。

当時は実銃であるとの前提と全体が鋲に覆われた不明瞭な状態であったことから、以下のようない推測を行った。

- ① 地金が良質のためアメリカ製の可能性が高い。
- ② スパー型なのでコルト製ではない。
- ③ 台座部分に角があるため、S & W ではない。
- ④ メジャーな製品ではないため、南北戦争時（1861～1865 年）に、アメリカ系の中 小メーカーや町工場で、大量に作られていたポケットピストルである可能性が高い。

こうした推測をもとに調査を進めたが、全く情報を得ることができなかった。

その後、保存処理が進められた結果、5 で述べ



エックス線写真（福田 2018 より転載）

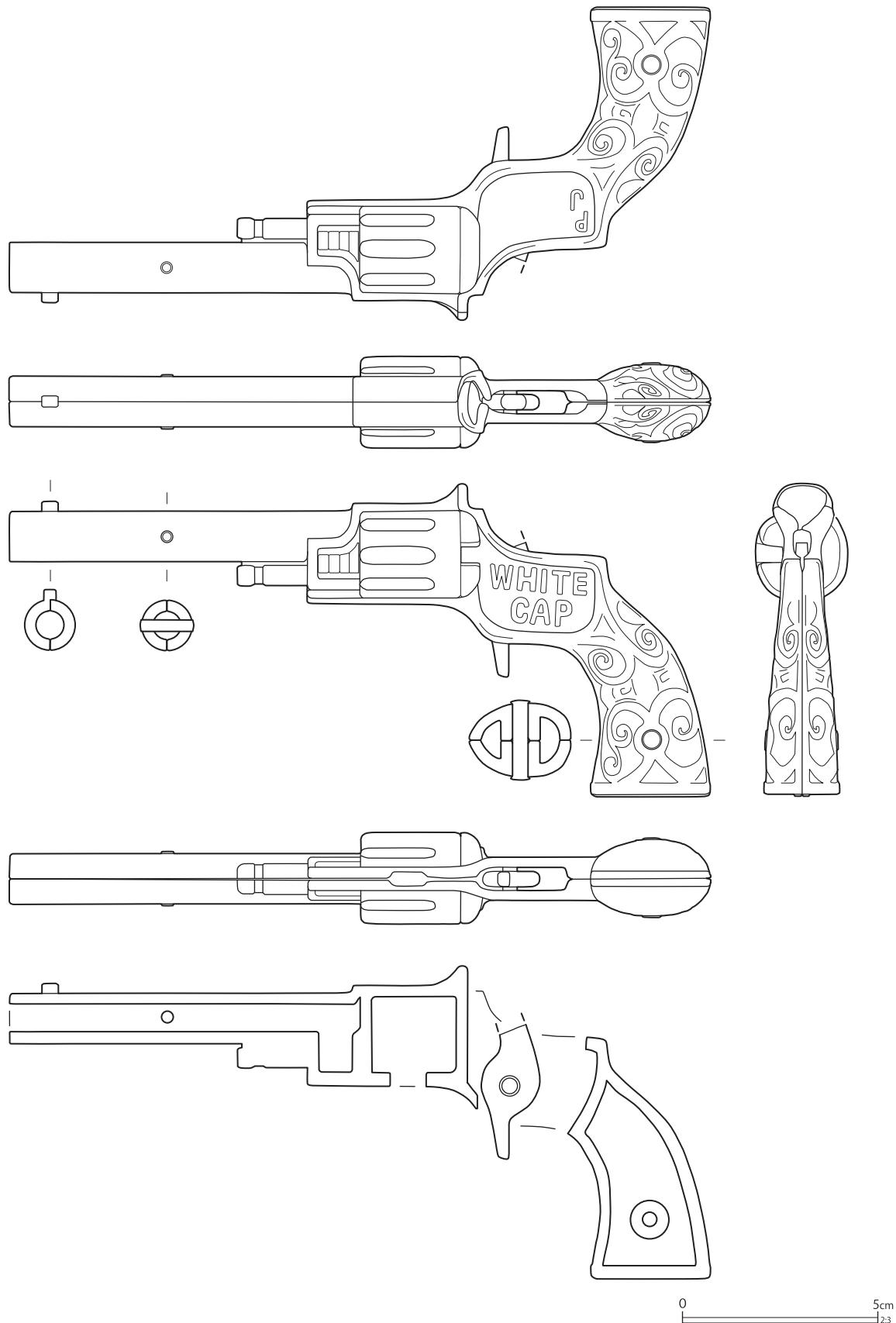


保存処理前のキャップガン（福田 2018 より転載）



保存処理後のキャップガン

第6図 栗橋番士屋敷跡のキャップガン



第7図 キャップガン実測図

たような台座部分の「WHITE CAP」のロゴや、全体に蕨手状の文様が施されていることが明らかになった。

より遺物の様相が明らかになったため、製品に関する情報は容易に集まるものと期待したが、一年あまり全く情報が得られなかった。

試みにインターネットで検索をかけると、アメリカの「ニコルズキャップガン」のサイトに「WHITE CAP」のロゴのある写真が掲載されているのが明らかになった。

計2点が掲載されていた。1点は銀色の輝きを持った状態で、1点は暗褐色の所謂鉄錆色の状態であった。

5の観察所見とも合致し、加藤家出土の拳銃形の鉄製品は所謂「アンティーク・キャップガン」であることが判明した。

その後、再度検索を行ったが発見できず、メールを送ってみたが返事がなく、それ以上の追跡ができなかった。権利上の問題もあることから写真の掲載は控えたい。

日本国内では、1970年代以降全く独自の形でモデルガンの市場が形成、発展してきたのは、よく知られているところである。それ以降のモデルガンとしてのキャップガンの歴史は詳細な研究や著作が多くある。

しかし、逆に明治、大正時代の輸入玩具としてのキャップガンの研究は行われていないのが実状である。

株式会社トーアズの照井宏氏からは、以下のような御教示を頂いた（註2）。

「1890年アメリカのシェパード社が製造。

火薬を使って音と光（火花）と煙で、カウボーイなどにあこがれていた当時の子供たちのなりきり玩具の一つ。

護身用ではなく最初から玩具として製作されていたのではないかと思います。

鎌びた銃全体が映っている画像では銃口にオレ

ンジ色のキャップのようなものがついておりますが、これは警察官などがおもちゃと認識するためにつけることを義務付けられたようです。（以前に本物と間違えた警察官が事故を起こしたため。）

もしかしたら、輸入品として当時日本に持ち込まれたものかもしれませんね。

（製造年代と発掘された層の時代があつてあるため）

当初、筆者（福田）は伴出遺物の年代から19世紀中葉ごろと考え、幕末、維新当時の社会情勢により、『足立家文書』の記事から窺えるように、常に危険にさらされていた番士が、護身用に所持していた「実銃」なのではないかと推定していた。大きさなどから殺傷能力がなく、音を出すだけでも効果があったのではないかと考えたからである。

既に当時拳銃は、南北戦争の終了後に中古品が大量に輸入されたとされている。それに伴う記録はほとんど残されていないが、慶応2年にフランスのナポレオンIII世がル・フォショウを20挺、徳川慶喜に送ったとの記録がある。

また、長崎県長崎市出島和蘭商館のル・フォショウ（梶2008）、明治10年（1877）に焼失した熊本県熊本市熊本城本丸御殿跡の小広間から出土したS & W 2型（山下2016）などが出土例として知られている。

幕末の志士が拳銃を所持していたという逸話も多い。

文書や現在明らかになっている歴史の内容によって、出土遺物の正当な評価を見失ってしまったのである。

当時のアメリカは、ゴールドラッシュを契機に西部へと進出したカウボーイによるロングドライブが成功し、カウボーイ文化が形成されていた。1883年に始まるバッファロー・ビルによる「ワイルド・ウェスト・ショー」などで、実態とは異なる荒々しい西部で活躍する正義のカウボーイというイメージが広がり、今でもアメリカの男性を

象徴する職業として、カウボーイ人気は根強い。当時のアメリカでは、カウボーイは子供たちのあこがれの職業の一つであった。それを背景として、「カウボーイごっこ」をする玩具として作られるようになったのがキャップガンである。

狩猟や放牧以外ではほとんど使われなかつた彼らの銃のうち、回転式拳銃にはスペインやネイティブアメリカンの装飾を取り入れたものが多く、番土屋敷跡出土のキャップガンもそれを模したものと考えられる。

1872年には玩具の輸入が始まる。維新後の番士たちの去就については詳しくなく、その経緯は不明だが、輸入玩具として流通したキャップガンが、栗橋の加藤家にもたらされたものと考えられる。

## 7 結びにかえて

以上、栗橋関所番土屋敷跡のキャップガンについて検討を加えてきた。

再実測の記述については、筆者らは、銃器は無論のこと、キャップガンやモデルガンの知識が全くないため、用語の誤りや齟齬がある可能性がある。こうした製品に詳しい諸氏からご指摘いただければ幸いである。

出土地点や年代等について詳述したため、レポートとしての体をなすことはできた。しかし、多くの課題を逆に残すことになってしまった。

まず、このシェパード社製のキャップガンの生産についての基礎的な情報が全く得られなかつた。当時のアメリカ社会のどのような社会背景の中で生産が開始され、どの程度流通したものなのか。玩具としての扱いはどうであったのか。全く明らかにできなかつた。

次に、日本国内での流通の様相が全く分からぬ。当時のこうした銃器形玩具についての研究は管見に触れる限りでは見出せなかつた。横浜などから輸入されたのであろうが、国内でどのように

流通し、どんな人々が買っていたのだろうか。

恐らく、それほど安価なものではなかつたであろう。果たして玩具として扱われていたのだろうか。再実測を通して、その作りの精巧さと、ずつしりとした重量感を感じた。一見しただけでは、玩具とは見分けられなかつたのではないか。日本国内で、本当に玩具として扱われていたのか疑問が残る。

そして、それがどのような経緯で、どんな理由で加藤家にもたらされたのであろうか。それが最も大きな課題であろう。

こうした遺物が遺跡から出土するとは全く思っておらず、何ら結論がなく、課題ばかりを残す結果となってしまった。

調査を継続し、また改めて課題の各点について検討することにしたい。

本稿は、1～4・6を福田が、5を瀧瀬が執筆し、7を両者が協議の上、福田が執筆した。

## 謝辞

本稿を作成するに当たり、当初実銃として取り扱つたため、当時生涯学習課主幹であった君島勝秀氏に手続きにお骨折り頂きました。感謝いたします。また資料調査に当たり、以下の方々、機関に御教示頂き、お世話になりました。お名前を上げ感謝いたします。

池尻 篤 井上真帆 木戸春夫 小林太三  
杉山正司 照井 宏 野中 仁 卷島千明  
水口由紀子 村山 卓  
埼玉県教育委員会

註 1 栗橋関所番士の内、足立家、島田家には大量の文書が残されている。

足立家文書は、関所の勤務を巡る日誌である「御関所御用所諸記」、日記の抜粋「御関所日記書抜」「御用留」、通行手形、鑑札などの証文類、足立家屋敷の絵図面等から構成されている。

足立家屋敷跡の絵図面は複数残されており、それぞれ間取りが若干異なっている。その内明治17年（1884）の記載のある絵図面が、発掘調査で検出された遺構とほぼ合致しており、建物の年代を示す資料となった。

盛土下の加藤家第2号建物跡は、足立家文書に記録された寛政12年（1800）に加藤家屋敷まで延焼した火事の直後に建てられたと推

定された。盛土の具体的な年代が明らかになった。足立家文書と発掘調査成果の具体的な照合を示す好例であろう。

足立家文書は、埼玉県立文時館に寄託され、埼玉県史叢書としてまとめられている（埼玉県立文書館 2002・2003・2010・2012・2013）。

島田家文書は、足立家文書の「御関所御用所諸記」等と同様の「御用留」等の記録、鉄砲手形、女手形などの証文類によって構成されている（久喜市立郷土資料館 2017）。

註 2 加藤家のキャップガンについては、埼玉県立歴史と民俗の博物館の杉山正司、水口由紀子両氏のご協力により、株式会社トーアズの照井宏氏をご紹介いただき、御教示を得た。

## 引用・参考文献

- 梶 輝行 2008 「カピタン（商館長）部屋跡出土のピストルと銅製摩擦管について」『出島和蘭商館跡カピタン部屋跡他西側建造物群発掘調査報告書』第2分冊（考察編）pp. 167-178 長崎市教育委員会
- 亀井俊介編 1999 『アメリカ文化事典』 研究社
- 久喜市教育委員会 2015 『久喜市栗橋町史』 第1巻 通史編上
- 久喜市立郷土資料館 2017 『栗橋関所の番士でござる—島田家文書を紐解く—』
- 埼玉県 2002 『栗橋関所史料一 御関所御用諸記 I』 埼玉県史料叢書 13(上)
- 埼玉県 2003 『栗橋関所史料二 御関所御用諸記 II』 埼玉県史料叢書 13(下)
- 埼玉県 2010 『栗橋関所史料三 御関所日記書抜 I』 埼玉県史料叢書 14
- 埼玉県 2012 『栗橋関所史料四 御関所日記書抜 II 御用留 I』 埼玉県史料叢書 15
- 埼玉県 2013 『栗橋関所史料五 御用留 II 御関所日記』 埼玉県史料叢書 16
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019 『よみがえる栗橋宿』
- 蘆田伊人校訂 根本誠二補訂 1996 『新編武藏風土記稿』 第4期 雄山閣
- 東部地区文化財担当者会 2013 『埼葛・北埼玉の水塚』 東部地区文化財担当者会報告書第7集
- 中橋友子 2015 「カウボーイ」は死んだのか—アメリカ社会の中でのカウボーイ像の変容— pp. 55-69  
『小池学園研究紀要』 第13号 埼玉東萌短期大学
- 福田 聖 2018 『栗橋関所番士屋敷跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第436集
- 福田 聖 2019 「報告2栗橋関所と番士屋敷跡」 2019 『よみがえる栗橋宿』 pp. 9-10 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 村山 阜 2020 『栗橋宿本陣跡 II』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第460集
- 山下宗親 2016 「5. 近代武器・軍用品」『熊本城跡発掘調査報告書2—本丸御殿の調査—』 第2分冊 pp. 239-263  
熊本城調査研究センター報告書第2集